

第18回 作業療法ジャーナル研究助成

川端敦史氏の「地域在住高齢者に対するタブレットを通した生活スタイル向上プログラム（Lifestyle Improvement Program through Tablets）の効果検証：クロスオーバーランダム化比較試験（RCT）」に決定



川端 敦史氏

過日、第18回 作業療法ジャーナル研究助成対象選考会が開かれ、川端敦史氏の研究は次点であった。最多得票は松本氏の研究であり、例年は1テーマのみの選定であるが、時流に沿った内容であること等を理由に、特例として次点の川端氏のテーマも採択することにした。助成期間は3年間であり、助成金額は20万円である。研究経過については、次年の本誌に掲載する。

第18回研究助成を受けての言葉

川 端 敦 史

（JR 東京総合病院、作業療法士）

このたびは、第18回作業療法ジャーナル研究助成を賜りましたこと、深く御礼申し上げます。皆様のご協力をいただきまして、無事に研究を進めることができております。

高齢者の社会参加を目的とした介護予防に関しては、超高齢社会にあるわが国において喫緊の課題です。本研究ではICT機器を用いた社会参加支援をテーマとして取り上げました。作業療法分野のICT機器を用いた研究では、孤独感の軽減や社会参加の促進、新たな生活様式の獲得といった効果が認められています。パイロット研究として実施した、地域在住高齢者へのICT機器を用いた集団プログラムでは、QOLの向上、IADLの実施状況への効果が示唆されました。

本研究では、65歳以上の地域在住高齢者を

2群にランダムに割り付け、ICT機器を用いたプログラムと運動を実施するプログラムの両プログラムを並行実施し、群を入れ替え、もう一方のプログラムを行うクロスオーバーRCTを実施し、生活機能、QOL、社会参加に変化が期待できるのか検討します。今後の介護予防領域において、ICT機器と運動を組み合わせて実施した際の相乗効果や新たな介護予防の糸口となる可能性があります。

研究実施に際し、今回の研究費のご支援は非常にありがたく、大変感謝しております。今後も真摯に課題と向き合い、エビデンスを積み重ねていくことが一番の恩返しであると感じております。少しでも社会に還元できるよう研究を重ね努力して参ります。